

〔講演要旨〕

ラオスの農村における野生生物資源利用とその意義

足達慶尚¹・宮川修一²・池口明子³(¹岐阜大学大学院連合農学研究科・²岐阜大学応用生物科学部・³横浜国立大学教育人間科学部)

ラオスの農村では伝統的、自給的な稲作を主業とする一方、野生生物資源の利用も盛んに行われており、農家はさまざまな生業を複合的にいながら生計を立てている。1990年代以降、自由経済導入による農村生活の変化が報告されており、高次産業の発達に伴う産業の効率化や環境悪化によって野生生物資源の利用は減少している事が予想されるが、そのような報告はない。本研究では首都近傍のサイタニー郡とその郡内のドンクワイ村を対象に、土地利用や社会経済状況と野生生物資源の産出・利用状況を調査し、それらの関係性から農村における野生生物資源の意義を考察した。

サイタニー郡では2004年7月～2005年3月の期間に郡内の全村(104村)の村長を対象に聞き取り調査をおこなった。その結果、野生生物資源は産出場所別に水田10種、水域20種、森林52種、疎林51種、氾濫原22種、屋敷地6種が確認できた。土地利用は村落間に大きな差異があったが、野生生物資源の産出数には大きな違いが見られなかったため、それらの明確な関係性は確認できなかった。

た。このことから、わずかな面積からでも資源は産出されており、村人は強い資源利用指向があることが示唆された。

ドンクワイ村では2回の悉皆調査(2005年8月～9月、2007年4月～5月)を行い、世帯の農業・社会経済状況と野生生物資源利用状況を調査した。その結果、最盛期における一月あたりの野生生物資源販売額は賃金労働と同等であり、十分な収入源になりうる事が明らかとなった。また、米の自給ができない世帯では自給世帯に比べ資源の販売世帯が多く、米不足の補償として機能していることが示唆された。2000年以降に販売世帯数が急増しており、都市部の経済成長と市場の増加が野生生物資源の需要を増加させ、野生生物資源に貨幣価値をもたらしていると考えられた。野生生物資源は容易に採集ができるため、市場と接続した村落では大きな現金収入源になる可能性が考えられるが、その維持・管理のための方策が必要である。

〔発表：第140回講演会〕